

## おわりに

生徒の実態や要望など、現状を知るために、3つの事例において事前アンケートを行った。どの事例においても生徒は「読むこと」を得意とし、「話すこと」や「書くこと」を苦手としている。また、生徒ができるようになりたいことは圧倒的に「話すこと」であり、中でも英語でコミュニケーションがとれるようになりたいという希望が多い。生徒たちには、自分のことを伝えたい、相手のことを理解したいという思いがあることが分かる。どの事例でも、段階的に授業に自己表現活動を取り入れ、自分の考えを伝えることができたという達成感をもたせることで、学習に対する意欲やコミュニケーションを図ることへの意欲を高める工夫をしている。

事例 では、生徒のコミュニケーション能力の伸長を目指し、教科書の1つのレッスンの中で、ストーリーリプロダクションを中心とした言語活動を行い、生徒の自発的発話量を増やす指導をした。まずは英語に触れる機会を増やすため、教師ができるだけ英語で授業を行った。また、文法や語彙をコミュニケーションを支えるものとして捉え、ワークシート等を工夫することで、文法指導を言語活動と一体的に行う指導とした。最終的には内容に関するディスカッションを行った。そのように段階的に指導することで、相手の考えを理解し、自分の中で整理し、それに対する自分の考えを伝えようとする姿勢を身に付けさせることができた。

事例 では、和文英訳中心だった「ライティング」の授業に言語活動を取り入れることで、自己表現力を身に付けさせるとともに、生徒のコミュニケーションへの関心・意欲を高めた。まず、教科書で学んだ重要表現を用いて何か自分のことを伝えるという活動から始めた。また、QUICK WRITE という英文を書かせる活動を改善し、与えられたテーマに関して、自分の考えを伝えるという形での活動を毎時間実施した。さらに、書くだけではなく、それを相手に伝えるという活動にまで発展させた。英問英答なども取り入れ、伝えることと理解すること、つまり英語でのやりとりを何度も体験させた。ライティングにおいても、様々な言語活動を取り入れ、コミュニケーション能力を伸ばすための効果的な指導ができる点に注目していただきたい。

事例 では、生徒への英語のインプット量を徐々に増やし、アウトプットにつなげた。教科書の本文を読む前後に、聞いたり、話したり、書いたりする活動を取り入れて、生徒の英語に触れる機会を増やした。生徒に自己表現活動をさせるために、段階的なタスク活動を取り入れた。パワーポイントを使用したり、ワークシートを工夫したりして、生徒の英語学習への意欲を高め、意欲的に授業に取り組みせる指導をした。生徒の現状を踏まえ、分かる授業を心がけながら、生徒の自己表現力を高めていくことができた事例である。

授業は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に指導し、生徒に英語運用能力を身に付けさせるためにある。例えば、英語を読んだらそれについて何か書く、英語を書いたならそれについて相手に伝える、相手の意見を聞いたらそれに対する自分の意見を言う、というように一つの言語活動に、何か別の活動に組み合わせることで、有機的な関連を図った指導ができる。生徒にとって魅力ある内容であること、興味・関心がもてる言語活動であることが重要な要素である。生徒の自己表現力と、コミュニケーションを図ることへの意欲を高めるためには、まず、毎日「わかる授業」を心がけることが大切である。知識を与えることはもちろん大切であるが、それを活用させる場面がある授業が、生徒にとってよい授業であると考えられる。

高等学校における教科指導の充実

外国語科(英語)

コミュニケーション能力の伸長を目指した授業展開の工夫

発行 平成22年3月

栃木県総合教育センター 研究調査部

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070

TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>